

環境だより



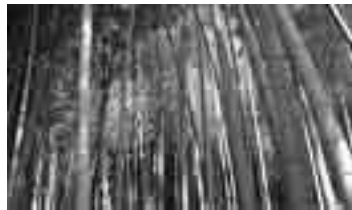
環境課 ☎66・1122

新緑の初夏、山野に出かけるのに気持ちのよい季節になりました。相楽や坂本のように、私たちが気軽に出かけられる距離にある山すそで、雑木林があり、農業や林業など多様な土地利用が行われている地域一帯を「里山」といいます。

近年、この里山で手入れされず伸び放題になった竹林がさまざまな問題を全国的に発生させています。成長の速い竹は、里山の樹木への日照をさえぎってしまいます。その結果、多くの動植物で構成される雑木林が、徐々に竹だけの林になったり、竹が里山の畑のなかに侵入したりして

里山で増えつづける竹、どうする？

ます。市内でも、竹に占領された雑木林などをあちこちで見かけます。竹は鳥が種を運んで増えたものではありません。人が植えたものですから、人が手入れして面倒を見なくてはなりません。里山について、もう一度考えてみませんか。



☆蒲郡の里山一口メモ☆
蒲郡市の里山面積1,653ha
(平成8年度愛知県調査)

市内の里山は、薪や農業用資材を取る場所として利用されてきました。また、戦後しばらくの間は家屋の建築材供給源として用いられた時期もあります。

現在は自然観察会や探鳥会、散策のコースとして、またキノコ原木林として活用されています。

消防最前線

Journal of Fire Department 119

URL <http://www.city.gamagori.aichi.jp/syoubou/index.html>

消防車、救急車の通過とともに鳴り響くおなじみのサイレン音。「ウーウー」「ピーポー」の音を耳にすると誰もが振り返り、緊張感が高まります。そして、この音はわれわれ消防士の士気も高めます。

一昔前までは、サイレンを手動で鳴らしながら災害現場に向かったものでした。鳴らし続けるためには、人力でハンドルを回し続けなければなりません。このハンドルを誰が回すかは、出動ごとに違っていたようです。早く防火衣を着装し、消防車に乗ると偶然サイレンの位置であったり、若手だからということ任せられたりとさまざまでした。

サイレン

しかし、誰がサイレン係になるにしろ、出動から現場まで一人で回し続けるには限界があります。さらに、当時の消防車には屋根も隊員のいすもなく、振り落とされないように片手で見つみながらもう一方の片手でサイレンを回すというありさまでした。これでは現場に着くまでにへとへとになってしまいます。そこで途中でサイレン係を交代することもあったそうです。

今ではボタンひとつで鳴り出す電子式のを装備され、サイレン係もなくなり、隊員の負担も軽減されました。

サイレンは赤色灯と合わせて、消防車、救急車の存在を皆さんに知らせる大切なシンボルです。遠くから鳴り響く突然のサイレンに右往左往することなく落ち着いて安全に行動してください。